

言右納史、朝承恩暮賜死、行路難不在水不在山、只在人情反覆間。

〔松葉名所和歌集十〕天中河 遠江

天津空中なる川の名のみしていつかはやすの渡り成けん

長明

右記云、天中河にいたりぬ、これは玄なの、すはの海の末となんいへる、わたり船をみれば、棹もさしやらぬなるべしとなん

〔西行物語〕すでにあづまのかたへ下るに、日數つもれば、遠江國天中のわたりといふ處にて、武士の乘たりける舟に便船をしたりけるほどに、人おほくのりて舟あやうかりけん、あの法師おりよおりよといひけれ共、わたりのならひとおもひて、き、入ぬさまにてありけるになさけなくむちをもつて西行をうちけり、血など頭より出て、よにあえなく見えけれ共、西行すこしもうらみたる色なくして、手をあはせ舟よりおりにけり、これを見て供なりける入道なきがなしみければ、西行つくぐとまぶり、都を出し時、みちの間にていかにも心ぐるしき事あるべしとひしは是ぞかし。略○中 自今以後も、かゝる事はあるべし、たがひに心ぐるしかるべきれば、なんちは都へ歸れとて、東西へぞわかれける、

〔源平盛衰記〕内大臣關東下向附池田宿遊君事

天龍河ヲ渡リ給ニ、水増ヌレバ、船ヲ覆ト聞給ニモ、西海ノ波上被思出ケリ、

〔吾妻鏡〕二十五承久三年五月廿八日辛亥、雨降武州○北條時房到遠江國天龍河、連日洪水之際、可有舟

煩之處、此河頗無水、皆從步涉畢、

〔吾妻鏡〕三十二嘉禎四年○元年仁貿經以前進發、插王霸之忠、不及狐疑、欲競渡天龍河之間、浮橋可破損歟、雖加制敢不拘之由奉行人横地太郎兵衛尉長直等馳申、○中此河水俄落、供奉人所從等者、不能渡、浮橋又無乘船沙汰、大半渡河、水僅及馬下腹云云、